

令和5年度

教職課程

自己点検・評価報告書

江戸川大学

令和6年3月

## 江戸川大学 教職課程認定学部・学科（免許校種・免許教科）一覧

## 社会学部

学 科	免許状の種類
人間心理学科	中学校教諭一種免許状(社会) 高等学校教諭一種免許状(公民)
現代社会学科	中学校教諭一種免許状(社会) 高等学校教諭一種免許状(公民)
経営社会学科	中学校教諭一種免許状(社会) 高等学校教諭一種免許状(公民)

## メディアコミュニケーション学部

学 科	免許状の種類
マス・コミュニケーション学科	中学校教諭一種免許状(国語) 中学校教諭一種免許状(社会) 高等学校教諭一種免許状(国語) 高等学校教諭一種免許状(公民)
情報文化学科	中学校教諭一種免許状(英語) 高等学校教諭一種免許状(英語) 高等学校教諭一種免許状(情報)
こどもコミュニケーション学科	幼稚園教諭一種免許状

## 大学としての全体評価

江戸川大学の教職課程は、平成19年の設置以来、本学の教育理念である「人間陶冶」を教育の場において体現することをめざしている。

本学の教育理念である「人間陶冶」を支えるため近年においては教養教育の充実を目指し、伝統文化歴史理解の深化、国語力の育成等、新教育基本法の理念や「新しい時代に求められる教養」の理念に合致したカリキュラムの充実を図ったところである。また、同時に教職課程のカリキュラムも一部改訂し、ボランティア活動の充実、生涯学習の理解促進等も図ってきている。

さらに「時代が求める専門性」については、各学部・学科において教育の充実を図っており、また、建学以来の本学の教育の柱である、「国際化」「情報化」への積極的な対応を行っている。このような取り組みが大学全体はもとより、教職課程として教養と専門性を高めることとなり、さらなる充実として結実する効果を期待しているところである。

教職課程の運営は、教職課程全般の事柄を一元的に所掌する「教職課程センター」を設置し、全学科の教員を含んだ教職課程運営委員会によって全学的に共通した理解を持った教職課程運営を行っている。また、運営上の細かな事項については、教職実務者会議を設置し、その対応に当たっている。教職課程センターは、基礎・教養教育センター及び教務委員会と必要十分に連携している。さらに、教職課程運営において、PCの積極活用や学生が自由に閲覧可能とする図書配架の際には学術情報課及び図書館が積極的支援を実施しており、施設設備についても教職セミナー室等の充実にも配慮している。

教職課程の履修者は、こどもコミュニケーション学科が最も多く、次いで経営社会学科のスポーツ部所属の学生が多い。履修者の多様さが特色である。中・高の教員養成では、教職課程の授業、特に本学独自に実施している「教職セミナー」においては、学年・学部・学科に関係なく異なる専門性を持つ学生が交流する場となり、幅広いコミュニケーション力の育成あるいは幅広い視野の獲得等、教職課程の特色を生かした学生育成の場となっている。

なお、本学は2学部で構成されているが、設立からの経緯もあり、学部の独立性が他の大学に比して弱く、常に2学部が一体（例えば、教授会等）となって運営されているため、教職課程の運営についても2学部を強く連携して一体的になされている。

以上の通り、全学諸機関と教職課程の連携により教職課程理念の実現を図っている。

江戸川大学

学長 小口彦太

目次

I	教職課程の現況及び特色	.....
II	基準領域ごとの教職課程自己点検・評価	.....
	基準領域1 教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な 取り組み	.....
	基準領域2 学生の確保・育成・キャリア支援	.....
	基準領域3 適切な教職課程カリキュラム	.....
III	総合評価（全体を通じた自己評価）	.....
IV	「教職課程自己点検・評価報告書」作成プロセス	.....
V	現況基礎データ一覧	.....

## I 教職課程の現況及び特色

### 1 現況

- (1) 大学名：江戸川大学
- (2) 学部名：社会学部 メディアコミュニケーション学部
- (3) 所在地：千葉県流山市駒木 474
- (4) 学生数及び教員数

(令和 5 年 5 月 1 日現在)

学生数： 社会学部 教職課程履修 54 名／学部全体 1485 名

メディアコミュニケーション学部 教職課程履修 263 名／学部全体 1097 名

教員数： 社会学部 教職課程科目担当（教職・教科とも）23 名／学部全体 39 名

メディアコミュニケーション学部

教職課程科目担当（教職・教科とも）25 名／学部全体 38 名

### 2 特色

江戸川大学では 2 学部 6 学科で構成され、2023 年度の教職課程履修者は 317 名（中高の課程 83 名、幼稚園教諭課程 234 名）いる。こどもコミュニケーション学科の履修者が比較的多い。

幼稚園教諭養成課程の教育課程上の特色は 3 点ある。1 点目はメディアの積極的な活用である。同学部にマス・コミュニケーション学科があり、放送番組を利用した教育実践やメディアを取り入れた環境の構成を探究できる。2 点目は言語文化の重視である。コミュニケーションのための基礎力として言語を重視し、基礎理論の修得から実践力を育成する科目によりカリキュラムを構成している。3 点目は、体験に基づく学びの重視である。本学科では体験を学びにつなげるプロセスを「感じる」「感じたことを表現する」「感じたことから問題を発見する」「発見した問題の解決法を探究する」の 4 段階と考える。本学科における教育はこのプロセスをとおして体験を学びにつなげることを意図して行っている。具体的には、隣接保育所との連携、地域との連携、学外体験を取り入れている。

中高の教職課程の教育課程上の特色は 3 点ある。1 点目は、教職履修の 2～4 年生が一堂に集まり模擬授業を実施する教職セミナー（通称名。実際は 2 年生では「教職基礎演習」、3 年生では「教職総合演習」、4 年生では「教育実習事前・事後指導」の一部の時間

を充てている)を実施している。学年・学部・学科の制約がなくなり、教職課程の履修者間の交流に大きな役目を果たしている。2点目は、教育実習先に必ず教職課程担当教員が実習巡回に行き、学生の指導と共に学校現場からの指摘・要望をくみ上げて交流を図っている。3点目は、教職の模擬授業において、ITの活用を積極的に図っている。これは本学の建学以来の教育の柱である「情報化」を生かしたもので、全学生がPCを持っていることから、教科教育法の一環としてITを取り入れている。

また、教職に関係する科目は意図的に3限目までに設定するように努めている。その目的は、スポーツ部の活動と学業を両立させるためである。このため、競技スポーツ部に所属していても教職課程を履修することができるようになっている。実際に、スポーツ部で培った能力を生かして教職についている学生も多い。

## Ⅱ 基準領域ごとの教職課程自己点検・評価

### 基準領域 1 教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な取り組み

#### 基準項目 1-1 教職課程教育の目的・目標を共有

〔現状〕

江戸川大学の教育理念としては『人間陶冶（とうや）』を掲げている。「人間としての優しさに満ち、普遍的な教養と時代が求める専門性により社会貢献できる人材」が「人間陶冶」によって育成すべき人間像としている。また、開学以来の教育の使命「国際化と情報化に対応」しつつ、「人間としての優しさに満ち、普遍的な教養と時代が求める専門性」を身に付け、職業人として社会貢献することに喜びを見いだせる人材の育成を目的としている。

この理念の意義を深く理解し、この理念を教育において体現できる資質を持つ者を教員として送り出すことは、本学の教育上においても、また、社会的責務を果たす上でも必要なことである。

教員養成の目標は以下のとおりである。

本学の教職課程を通じ、

- 1、人とかかわりの大切さを理解し、実践・指導のできる、人間性豊かで教育愛と使命感に満ちた教員。
- 2、児童生徒の成長と発達、心理を理解し、児童生徒の行動や変化をとらえることができ、悩みや思いを受け止め、支援できる教員。
- 3、幅広い教養と学習指導の専門性を身に付け、児童生徒の実態に合わせ、わかりやすい授業を心掛けられる教員。
- 4、保護者や地域社会から信頼され、高い倫理観を持ち、心身ともに健康で、明朗快活な教員。

以上のような教員を育成し、子供たちが社会や環境に積極的に働きかける力を身に付け、未来に向かって夢を持つことのできる教育を実現できる人材を育成することを目標としている。

以上のことは、年度当初における学年別教職課程オリエンテーションにおいても毎年確認し、また、学生が必ず参照する教職ポートフォリオのトップページにおいていつでも参照できる状態にしてある。

また、育成を目指す教師像についても、各学科の代表教員（現状は学科長）が参画する教職課程センター運営委員会において必要に応じて確認し、その実現が図れるよう年度当初の教職課程センター運営委員会において年間の活動計画が審議されている。

学修成果については、履修状況、学外活動への参加状況、教員に必要な資質能力、の3つの観点が具体的に示され、教職ポートフォリオにおいて可視化を行っている。

### 〔優れた取組〕

年度当初に学年毎の教職履修学生を集め、教職課程の目的と活動方針を伝えることができる。また、個々の学生が教職履修上に持つ様々な不明点や疑問点を相談できる機会を設けている。何のために教職を履修しているのか迷う学生も多く、学習の目的の再確認する機会ともなっている。

教職課程センター運営会議の他に、教職科目を担当する専任教職員によって教職実務者会議を設けており、日々の諸問題について検討することにより、常に本学が目指す教員像に立ち返って話を進めることができている。

学修成果について、教職実務者会議によって毎年内容が検討されており、この作業が関係教職員の意識を一つにしている。

### 〔改善の方向性・課題〕

現在は教職実務者会議が原案作成、教職課程センター運営会議で了承、という流れになっているが、やや手続き的に形骸化していることは否めず、教職と直接かかわらない教職員への情報伝達と会議へ参画しやすくなる方策を考える必要がある。

また、現在年度当初に教職を履修希望の学生全員に配布している「教職課程履修の手引き」には、表題通りに履修に関してのみ記載されているので、今後は教職課程教育の目的・目標も掲載して、意識の共有にも役立てることができると考える。

### ＜根拠となる資料・データ等＞

- ・資料 1-1-1 : 教員の養成の状況についての情報の公表

[https://www.edogawa-u.ac.jp/about/public\\_info/kyouikujoho/](https://www.edogawa-u.ac.jp/about/public_info/kyouikujoho/)

- ・資料 1-1-2 : 教職ポートフォリオ ストリーム最上段・トピック参照

<https://classroom.google.com/c/NjE0ODg0MDM4MjUy>

- ・資料 1-1-3 : 教職課程センター運営委員会議事録

- ・資料 1-1-4 : 教職実務者会議議事録



## 基準項目 1 - 2 教職課程に関する組織的工夫

### 〔現状〕

幼稚園教諭養成課程においては、基準に基づいて専任教員を配置しており、専任教員の 11 名のうち 4 人が実務家教員である。また、中高の養成課程においても、基準に基づいて専任教員を配置しており、教科教育法（情報科教育法を除く）、道徳教育の指導法、教育実習、等の実務家教員を配置している。

本学の組織構成として 2 学部に分かれているが、教職課程運営においては共同運用であり、すべての事項において同一歩調が取れている。また、教職課程を担当する職員も両学部の学生を対象として事務を行っている。

教員と事務職員の関係は、日々の活動の中で相互に補完する関係にあり、教員養成に関する制度的な最新情報の収集伝達あるいは教職課程で行う実践的運用と法令との適合性の検証、教員に相談できない学生への対応等は事務職員が主に担当し、教育活動の強力な支援となっている。また、教職に関わる各種会議においては当然に事務職員も参画している。また、幼稚園教諭養成課程では、幼稚園実習を支援する実習センターに職員を配置しており、非常に密に情報交換ができています。

教職課程教育を運営する上での施設・設備は十分に整備されている。デジタル教科書に対応している電子黒板も設置している。また、全教室でプロジェクタ等の投影機器および学内 Wi-Fi が整っており、どのような教育方法にも対応できる体制となっている。

教職課程の質的向上のために、全学で行っている授業評価アンケート及び学習行動調査を利用し、教職課程を履修している学生の特性を把握することに努めている。幼稚園教諭養成課程においては、進路状況を HP 上に提示している。幼稚園教諭養成課程の状況については、学科として HP 及び入学ガイドブックにおいて詳細に情報を提示できている。

中・高の教員養成の状況について、教職課程の概要、具体的な教育内容及び特色ある教育方法（教職セミナー、教職合宿）及び卒業生の体験談、等は HP 上に詳細に掲載している。当然に、施行規則第 22 条 6 に関する情報は公表している。

幼稚園教諭養成課程は学科で構成されていることから、自己点検・評価の対象となっており、毎年全学の自己点検・評価委員会の調査対象となっている。中・高の教職課程は特殊性が多く、全学での自己点検・評価の対象外となっている。

### 〔優れた取組〕

本学は中規模大学であり、教職課程履修者もそれほど多いわけではないので、教員及び事務職員双方で学生との関係が密であり、それぞれの情報を共有する機会も日常的にあり、非常に細かいレベルまで情報共有ができています。

指導法の授業においては、実務家教員が担当しており、教育現場に合わせた指導方法の確立に大きく寄与している。また、研究者教員と実務家教員との交流は大きくはない組織なので日々行われており、特に学生の学習状況の把握については熱心に行っている。

全学生がPCを持っているため、模擬授業を行う際には、原則としてITを活用した授業展開をするように指示ができています。

### 〔改善の方向性・課題〕

教職課程の質的向上のためのFD及びSDは行われていない。全学の教職員の関心を得られるような工夫が必要であると考えている。

中・高の教職課程における自己点検・自己評価はまだ全く手が付けられていない。但し、評価できる人が非常に限られるため、持続的な運用には工夫が必要である。

### ＜根拠となる資料・データ等＞

- ・資料1-2-1：江戸川大学教職課程センター規程 0805
- ・資料1-2-2：江戸川大学こどもコミュニケーション実習センター規程 0819
- ・資料1-2-3： ※教室内設置情報機器一覧（特に D203 多目的ホールの備品）
- ・資料1-2-4：授業用ノートパソコンの貸与

<https://www.edogawa-u.ac.jp/zaigakusei/gakuhi/gakuhi.html>

- ・資料1-2-5：こどもコミュニケーション学科 HP

[https://www.edogawa-u.ac.jp/colleges/d\\_child/index.html](https://www.edogawa-u.ac.jp/colleges/d_child/index.html)

- ・資料1-2-6：江戸川大学教職課程 HP

<https://www.edogawa-u.ac.jp/facility/kyoushoku/>

- ・資料1-2-7：教員の養成の状況についての情報の公表（再掲）

[https://www.edogawa-u.ac.jp/about/public\\_info/kyouikujoho/](https://www.edogawa-u.ac.jp/about/public_info/kyouikujoho/)

- ・資料1-2-8：自己点検・評価

[https://www.edogawa-u.ac.jp/about/public\\_info/selfcheck.html](https://www.edogawa-u.ac.jp/about/public_info/selfcheck.html)

- ・データ1-2-1： ※教職課程担当教員の一覧を出して、実務家教員に○印を付す

## 基準領域 2 学生の確保・育成・キャリア支援

### 基準項目 2-1 教職を担うべき適切な学生の確保・育成

#### 〔現状〕

幼稚園教諭養成課程では、理想とする学生像として、「コミュニケーションを大切に、教育や保育を学ぶことに情熱を持ち、子どもの最善の利益を考え実現するため、知識と技術の獲得に意欲を持つ学生」を設定している。

中・高の教職課程で学ぶにふさわしい学生像を「入学者受入れの方針」等を踏まえて、以下のように設定している。

(再掲)

- 1、人とのかかわりの大切さを理解し、実践・指導のできる、人間性豊かで教育愛と使命感に満ちた教員。
- 2、児童生徒の成長と発達、心理を理解し、児童生徒の行動や変化をとらえることができ、悩みや思いを受け止め、支援できる教員。
- 3、幅広い教養と学習指導の専門性を身に付け、児童生徒の実態に合わせ、わかりやすい授業を心掛けられる教員。
- 4、保護者や地域社会から信頼され、高い倫理観を持ち、心身ともに健康で、明朗快活な教員。

以上のような教員を育成し、子供たちが社会や環境に積極的に働きかける力を身に付け、未来に向かって夢を持つことのできる教育を実現できる人材を育成する。

募集・選考に関して、幼稚園教諭養成課程では、入学者選抜の基本方針の下、基礎学力とコミュニケーション能力を重視した選抜を行っている。中・高の教職課程では、募集及び選考において直接的には関与していない。

教職の履修開始に当たっては、学年ごとのガイダンスを必ず実施し、基本的事項の確認と履修に当たっての心得、及び履修指導を行っている。また、ガイダンス終了後も、必要に応じて、教職課程を履修している上位学年の学生や教職担当の事務職員、あるいは教職担当の専任教員が個別に相談に乗っている。

第2学年が終了する1月～2月にかけて、教職課程を履修している全学生と個人面談を実施し、介護等体験や教育実習に臨む意欲及びコミュニケーション力の確認を行っている。

さらに、実習参加条件として、一定の科目の単位履修を義務付けている。

学生の履修人数は、幼稚園教諭養成課程では、1学年50人に対して専任教員が11名在籍しており、適切な規模といえる。また、中・高の教職課程は1年次・2年次までの履修者はやや多いが、教育実習の申し込み前になると10人～20人程度まで履修者は減るため、教育効果の高い少人数教育が可能となっている。

「履修カルテ」を本学では「教職ポートフォリオ」と称している。2年時の個人面談や4年時の教職実践演習での学びの振り返りの際には、貴重な資料として活用ができています。

## 〔優れた取組〕

幼稚園教諭養成課程では、入試においてピアノの技量は不問にしている。但し、幼稚園実習では高度なピアノの弾き語りを要求する園も多く、3年間で習得が必要である。そこで、正規の科目でのレッスンだけでなく、毎日ピアノインストラクターを配置し、十分な練習量を確保できるように工夫している。

教職ポートフォリオは紙媒体ではなく、クラウド上に設定している。よって、無くしたり、汚したりする恐れがなく、また、パソコンだけではなくスマホでも操作が可能であり、いつでも必要な時に書き込みや確認ができるという大きなメリットがある。

## 〔改善の方向性・課題〕

本学の中・高の教職課程は、設置当時からの伝統で、「本当に教員になりたい学生を正規の教員として就職させる指導」を旨としている。なので、実践的な到達目標（知識の量ではない）を高く設定して、何度でも挑戦できるように模擬授業も多く設定している。結果、免許だけ欲しい学生にとっては負担感が強く履修継続が厳しくなる。かといって、到達目標を下げると就職できない。解決が難しい問題であると考えている。

学科によって、履修者数に差がみられる。強い影響力がある教員が所属する学科の勉強に注力するように指導をすると、明らかに教職の学生は減る。小規模の大学にとっては解決の難しい問題である。

## &lt;根拠となる資料・データ等&gt;

- ・資料 2-1-1 : 江戸川大学 こどもコミュニケーション学科 HP

<https://www.edogawa->

[u.ac.jp/about/public\\_info/kyouikujoho/admissionpolicy.html](https://www.edogawa-u.ac.jp/about/public_info/kyouikujoho/admissionpolicy.html)

- ・資料 2-1-2 : 教員の養成の状況についての情報の公表（再掲）

<https://www.edogawa->

[u.ac.jp/about/public\\_info/kyouikujoho/index.html](https://www.edogawa-u.ac.jp/about/public_info/kyouikujoho/index.html)

- ・資料 2-1-3 : 江戸川大学 入試ガイド 2024

<https://www.edogawa-u.ac.jp/img/media/24363.pdf>

- ・資料 2-1-4 : 行事予定カレンダー

[https://www.edogawa-u.ac.jp/zaigakusei/jugyo\\_risyu/cal.html](https://www.edogawa-u.ac.jp/zaigakusei/jugyo_risyu/cal.html)

- ・資料 2-1-5 : 教職課程履修の手引き（2023年度版） P5

- ・資料 2-1-6 : 教員の養成の状況についての情報の公表 (再掲)

[https://www.edogawa-u.ac.jp/about/public\\_info/kyouikujoho/](https://www.edogawa-u.ac.jp/about/public_info/kyouikujoho/)

- ・資料 2-1-7 : 教職ポートフォリオ (再掲)

<https://classroom.google.com/c/NjE0ODg0MDM4MjUy>

- ・資料 2-1-8 : 江戸川大学パンフレット 2024 P92

<https://www.edogawa-u.ac.jp/jukensei/about/index.html>

## 基準項目 2-2 教職へのキャリア支援

### 〔現状〕

全項目でも言及しているが、教員に対する学生数の比率がとて低いため意欲や適性を十分に把握している。また、教職を担当する事務職員との情報交換も日常的に行えるので、学生の動向を捉えやすい。また、教員採用試験の1次試験を突破した学生に対しては、就職課と共同で2次試験対策を個別に実施している。

また、2年に1回程度、教職大学院等へ進学したいという学生が散見される。そのような学生に対しては、個別で入学を希望する専攻の相談、入学願書作成の支援、面接試験の練習を行っている。大学としても、今年度上越教育大学大学院と連携協定を結び、側面から学生を支援している。因みに、昨年度は筑波大学大学院教育学学位プログラムに進学した学生がいた。

### 【幼稚園教諭養成課程】

教職に就くための各種情報については、こどもコミュニケーション実習センターが一元的に管理し、キャリアセンターとも情報交換をしつつ、情報提供をしている。こどもコミュニケーション学科の場合、実習先で直ぐに就職にスカウトされることもあることから、当該センターが所管している。

本課程に所属する学生は、入学時から就職への意識が高く、また、保育者不足の社会情勢でもあるため、教員免許状取得件数及び教員就職率については大きな問題にはなっていない。

### 【中・高の教職課程】

教職の学生には研究棟の4階(教職課程所属の教員が研究室を持つ)の教職セミナー室」を自由に使用できるようにしている。教科書、教材資料、教材作成道具、プリンタ、コピー機等を自由に使用でき、必要に応じて教職課程所属の先生に直ぐ質問できる環境にしている。この部屋の中に、教職への就職に関する各種情報を掲示し、教職課程所属の学生ならば自由に閲覧できるようにしている。

教職課程センターでは、正規のカリキュラムの他に、夏期(3泊4日)と春期(2泊

3 日) に模擬授業をひたすら繰り返す教職合宿を行っている(コロナ蔓延期は中断)。学生も教員も大変であるが、過去に教員採用試験に受かった学生は全て合宿経験者であることから、成果は十分に上がっていることがわかる。また、教職課程の学生の学習と親睦を兼ねて教材研究現地視察を行っていた。京都、鎌倉、横浜、最高裁判所見学、等工夫を凝らして実施した。コロナ後今年度再開の予定である。

教職合宿においては、教職課程を履修した卒業生が参加してくれており、教員採用試験への対応、学校現場の様子、現場感覚を生かした模擬授業へのアドバイスを伝えている。学生には高い評価を得ている。

#### 〔優れた取組〕

教職セミナー室は広くはないのだが、そこが逆に教職学生同士を近い存在に感じさせているように思う。この部屋では、学部も学科も学年も関係なく使用できることから、教職の学びの原動力となる学習集団が形成されている。

合宿で模擬授業を 1 日で 5 人行うことで、他人の模擬授業の失敗から学んでいることが多いと感じる。当然授業の初心者は同じようなところで躓くので、結果として何度も同じ失敗を見ることから学んでいるのだと推測している。大学の週 1 回の授業では経験できない、「習うより慣れよ」が実践できている。

#### 〔改善の方向性・課題〕

コロナが沈静化し、今年度教職合宿を実施したが、参加者が過去最低の 10 人であった。何らかの改善策を考えなければならない。

地域の多様な人材との接点を持っていない。どのように、教職課程の学生に生かせるのか工夫を考え導入を図りたい。

#### <根拠となる資料・データ等>

- ・資料 2-2-1 : 上越教育大学と江戸川大学との連携・協力に関する協定を締結

[https://www.edogawa-u.ac.jp/news/20230627\\_3.html](https://www.edogawa-u.ac.jp/news/20230627_3.html)

- ・資料 2-2-2 : こどもコミュニケーション実習センター

[https://www.edogawa-u.ac.jp/facility/kodomo\\_s/](https://www.edogawa-u.ac.jp/facility/kodomo_s/)

こどもコミュニケーション実習センター規程 0819 (再掲)

- ・資料 2-2-3 : 教職セミナー室・教職合宿・教材研究現地視察 (再掲)

<https://www.edogawa-u.ac.jp/facility/kyoushoku/about.html>

### 基準領域 3 適切な教職課程カリキュラム

#### 基準項目 3-1 教職課程カリキュラムの編成・実施

##### 〔現状〕

教職を学ぶ基礎能力としての言語能力及び情報活用能力の一層の獲得を目指すカリキュラムとしている。幼稚園教諭養成課程では、「ことばと表現（話しことば）」「言葉と表現（書きことば）」「情報リテラシー」の科目を毎年通じて必修科目として設定している。また、中・高の教職課程では「アカデミックスキル演習」という科目を設定し、2年間の必修科目としている。特に「アカデミックスキル演習」ではルーブリック評価を導入し、学生自身も主体的に学びに関与できる方策を講じている。

学科科目と教職課程科目相互の系統性確保を常に図っている。例えば、経営社会学科は国土や歴史など幅広い視野に立ち、実地の体験や調査をまとめた資料あるいは文献を多面的・多角的に分析することにより、現代社会や人間の在り方・生き方について主体的に考えることのできる人材育成をめざしている。この資質を持った者は教員としても教科指導及び生徒指導の基礎的資質を持つ者と考えている。教職課程コアカリキュラムへの対応については、教職課程センター運営会議が主体となり、教務委員会、学科教務委員、教務課職員が十分に打ち合わせをして、授業担当者へシラバスの作成依頼を行っている。シラバスの確認作業については、シラバス担当の教務課職員と教職課程センター所属教員によって実施している。必要に応じて、教職課程センター所属教員が授業担当者に指導・助言を行っている。

ICT機器の活用については、積極的に行っている。前述の通りにICT機器が整備されており、かつ、学生は全員PCを携帯していることから、教職科目に関わらずあらゆる場面で日常的にICT機器を活用している。幼稚園教諭養成課程では、「メディア活用論Ⅰ・Ⅱ」、中・高の教職課程カリキュラムとしては「教育ICT利活用論」を開講している。その学びを基に「教科教育法」「教職セミナー」においてICT機器を活用した授業展開をしている。その他、教職課程関連科目やその他の一般の科目の多くで、それぞれの教員がICTを利用した授業を展開しており、それらの受講経験が学生における「授業方法の学び」にもなっている。

アクティブ・ラーニングを積極的に導入している。幼稚園教諭養成課程では、アクティブ・ラーニングを主体として構成した「こどもコミュニケーション演習」、「こどもコミュニケーション実習」を必修科目として、「学校インターンシップ実習Ⅰ」「学校インターンシップⅡ」という科目を選択科目として設置している。また、「中・高の教職課程では、前述の「教職セミナー」はアクティブ・ラーニング（模擬授業）を主体として構成している。カリキュラム外の活動ではあるが、「教職合宿」もまた、アクティブ・ラーニング（模擬授業）を主体としている。

教職課程のシラバスは、他のシラバスと同様に、学修内容の評価方法等を明示している。作成されたシラバスは、教務委員が分担して再度内容を検証している。

教育実習の履修について、必要な履修要件を設定し、学生に明示し、教職ガイダンス時

において口頭による説明も行っている。

教職指導は、年度当初の学年別ガイダンス、2年次1月の個人面談を実施しているほか、「教職セミナー」の授業時間の前後、「教職セミナー室」での昼休み時間、などの授業時間外で適宜必要な指導を行っている。4年間の教職に関わる活動については「教職ポートフォリオ」にまとまっているので、「教職実践演習」において活用している。

#### 〔優れた取組〕

ICT機器を用いたアクティブ・ラーニングを展開できている。特に、コロナ蔓延以降、様々なオンライン授業が展開されており、学生もICT機器の使用については日常的に行っており、学生自身が主体的に活用する素地ができている。

教職履修学生数と教員数との割合が小さく、日常的に多チャンネルから学生とアクセスできる環境にあり、一人一人の学生の特性に合った指導を実施できている。

#### 〔改善の方向性・課題〕

今日の学校教育に対応する内容上の工夫については、個々の教員の善意に任せている部分があるので、組織的に関与する方策を講ずる必要がある。

「教職ポートフォリオ」を年度ごとに作成していない学生への対応に苦慮している。

#### ＜根拠となる資料・データ等＞

- ・資料3-1-1：アカデミックスキル演習

<https://www.edogawa-u.ac.jp/facility/kyouyou/skill.html>

- ・資料3-1-2：学則 別表第2
- ・資料3-1-3：「こどもコミュニケーション演習」「こどもコミュニケーション実習」「教職基礎演習」「教職総合演習」の各シラバス
- ・資料3-1-3：2023年度シラバス作成について（お願い）
- ・資料3-1-4：教職課程履修の手引き（2023年版）P5
- ・資料3-1-4：「教職実践演習」シラバス



## 基準項目 3-2 実践的指導力育成と地域との連携

### 〔現状〕

取得する教員免許状の特性に応じた実践的指導力を育成する機会を設けている。幼稚園教諭養成課程では、1年次に見学実習、2年時に幼稚園体験、4年時に教育実習と段階的にプログラムを設定している。大学で学んだ教養や専門知識を実践の場で活かしつつ、体験の反省をしながらステップアップしていき、教育実習に臨むことができる。中・高の教職課程では模擬授業を重視し、2年生から繰り返し模擬従業を行う機会を創出している。

本学では様々な体験活動（介護等体験、ボランティア、インターンシップ）をそれぞれ正規の教科に位置付け単位化し、事前のオリエンテーション、当日の振り返り、事後の振り返りを単位要件の一部としている。

大学が所在する千葉県流山市とは包括協力協定が結ばれており、様々な場面で連携協力を行っている。千葉県立の学校・施設とは、現在はコロナの関係で活動が休止しているが、県立生涯学習センターでの学習ボランティア、特別支援学校の行事ボランティア、「ちば！教職たまごプロジェクト」への参加、等を行っていた。個別の学校との協定も行っており、千葉県立松戸南高等学校とは連携協定を結んでおり、学生の希望があれば教員の職務を見学する機会を作ることができる。千葉県立流山北高等学校とも連携協定を結んでおり、学習サポートボランティアとして学生を派遣することができる。また、教職課程限定ではないが、今年度日本体育大学柏高等学校及び西武台千葉中学校・高等学校との連携協定が行われ、希望する学生に対して中学校及び高等学校の教育を体験できる機会を提供できるようになった。

教育実習協力校と本学教職課程センターとの連携については、事前の打ち合わせ、学生の研究授業の訪問時の実習関連の聞き取り、事後の書類での確認、を必ず行っている。

### 〔優れた取組〕

幼稚園教諭養成課程では、実践的指導力育成のために体系的にカリキュラムを組んでいる。中・高の教職課程では、模擬授業を繰り返すことで実践的指導力を育成している。どちらも手間がかかる方法であるが、着実に成果を出している。

体験活動を積極的に単位化しており学生の参加意欲の醸成に寄与していると考えている。

実習に関しては、どんなに遠い実習校であっても必ず教職課程所属教員が出向き、対面で実習校と連携・交流し、記録に残している。

### 〔改善の方向性・課題〕

地域の子どもの実態や学校における教育実践の最新の事情について学生が理解する機会を、カリキュラム的には創出できていない。早急に検討する必要がある。

千葉県教育委員会や流山市教育委員会と教職課程センターが定期的に話し合う機会は設定されておらず、今後の関係構築が望まれる。

<根拠となる資料・データ等>

- ・資料 3-2-1 : こどもコミュニケーション学科 実習プログラム

[https://www.edogawa-u.ac.jp/colleges/d\\_child/jissyu.html](https://www.edogawa-u.ac.jp/colleges/d_child/jissyu.html)

- ・資料 3-2-2 : 学則 別表第 2

- ・資料 3-2-3 : 江戸川大学と千葉県立松戸南高等学校との連携協定

<https://www.edogawa->

[u.ac.jp/about/usr/region\\_nagareyama.html](https://www.edogawa-u.ac.jp/about/usr/region_nagareyama.html)

- ・資料 3-2-4 : 江戸川大学と千葉県立流山北高等学校との連携協定

<https://www.edogawa->

[u.ac.jp/about/usr/region\\_nagareyama.html](https://www.edogawa-u.ac.jp/about/usr/region_nagareyama.html)

- ・資料 3-2-5 : 江戸川大学と日本体育大学柏高等学校の連携協定

[https://www.edogawa-u.ac.jp/news/20230718\\_2.html](https://www.edogawa-u.ac.jp/news/20230718_2.html)

- ・資料 3-2-6 : 江戸川大学と西武台千葉中学校・高等学校との連携協定

[https://www.edogawa-u.ac.jp/news/20230628\\_1.html](https://www.edogawa-u.ac.jp/news/20230628_1.html)

- ・資料 3-2-7 : 実習巡回報告書

### Ⅲ. 総合評価（全体を通じた自己評価）

教職課程センターは、2学部双方を対象とした教職課程運営を行い、教職課程の企画・運営に関すること、教員養成に関する調査・研究に関すること、教員養成に必要な資料の収集・整理に関すること、その他教職課程に関することを所掌している。教職履修学生数と教員数の比率が低い状況を生かして、学生の特性に応じた細かい支援を行っている。

教職課程のカリキュラムでは、大学全体の教育の柱である「情報化の推進」という基盤を生かし、実践的指導力の育成を特色として、ICT機器の活用も行いつつ授業運営がなされている。但し、学生によっては、PPを使用するのみの指導で満足をしている者もいるので、意欲的な使用を促す努力が引き続き必要である。

幼稚園教諭養成課程では、学科としてゼミナール活動等においてカリキュラム外での活動を様々に行っている。また、中・高の教職課程においても、年2回の教職合宿の実施、教材研究現地視察、教職セミナー室の設置、等カリキュラム外の活動において教職履修学生の学習に寄与する方策を講じている。

就職実績について、幼稚園教諭養成課程では、2022年度卒業生の24%が幼稚園あるいは認定こども園に就職している（他に保育所に52%）。中・高の教職課程では、2022年度教員採用試験合格者1名（私立学校）、大学院合格者1名、という状況である。当然、卒後に常勤講師を継続しながら正規の教員になっている卒業生はいるが、現況は残念ながら、大変低調であると言わざるを得ない。さらに学生と交流を深くして、教職の魅力を強く伝える必要がある。

今後の課題としては2点ある。

#### ①学生のニーズの把握について

教職課程センター運営委員会では、昨年度において全学で実施している授業評価アンケート及び学修行動調査の結果を用い、教職課程学生のニーズ把握を試みた。但し、質問事項は当然に全学を対象としたものなので、教職課程への学生ニーズを把握するには十分とは言えない内容であることから、今後教職課程センターにおいて独自に質問紙を作成し、学生のニーズを把握する努力が必要である。

#### ②教育委員会との連携について

残念ながら、教職課程を履修しながら途中で断念する学生が多く、また、教育実習を終えていながら、教員採用試験を受験する学生は毎年少数しかいない現状がある。学生の教職履修の意欲を継続させるためにも、地域の教育委員会と提携し、教育を一生の職にする意義とやりがいを経験するような方策を講じる必要がある。

#### IV 「教職課程自己点検・評価報告書」作成プロセス

- ①2023年5月、教職課程センター運営委員会において、教職課程自己点検・評価を行うことを決定し、進め方・日程について検討し、具体的方針を決定した。
- ②2023年5月、教職課程を支援する教務課職員による法令由来事項の点検を依頼した。
- ③2023年6月～10月、教職課程自己点検・評価を実施した。

今後、点検・修正を行った後に「教職課程自己点検・評価報告書」を作成し、確定した後にHP等への公表し、次年度へのアクションプランを策定する予定である。

## V 現況基礎データ一覧

令和5年5月1日現在

法人名 学校法人江戸川学園					
大学・学部名 江戸川大学社会学部・メディアコミュニケーション学部					
学科・コース名 (必要な場合)					
1 卒業者数、教員免許状取得者数、教員就職者数等					
① 前年度卒業者数					533
② ①のうち、就職者数 (企業、公務員等を含む)					432
③ ①のうち、教員免許状取得者の実数 (複数免許状取得者も1と数える)					38
④ ②のうち、教職に就いた者の数 (正規採用+臨時的任用の合計数)					14
④のうち、正規採用者数					14
⑤ のうち、臨時的任用者数					0
2 教員組織					
	教授	准教授	講師	助教	その他 (非常勤講師 )
教員数	33	8	7	0	29
相談員・支援員など専門職員数					